

# 第45回 南沙織だから実現できた 筒美京平の洋楽歌謡

私の大学生活は昭和45年から49年までの期間でしたが、それは作曲家・筒美京平の初期黄金時代と重なって、昭和歌謡を支えた大作曲家の音楽と共に過ごした幸せな4年間でもありました。

特に昭和46年における筒美の活躍はすさまじく、レコード大賞のテレビ中継に登場した曲を挙げていけば、それがわかります。大賞受賞曲が尾崎紀世彦『また逢う日まで』、作曲賞に朝丘雪路『雨がやんだら』と平山三紀『真夏の出来事』、最優秀歌唱賞ノミネート曲に渚ゆう子『さいはて慕情』、最優秀新人賞ノミネート曲に南沙織『17才』、さらには大衆賞に堺正章『さらば恋人』が選ばれ、これらの曲はすべて筒美の手によるもので、編曲も筒美自身が担当しています。

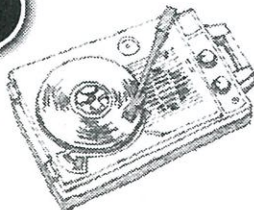
南沙織と同じCBSソニーから郷ひろみがデビューするのが翌昭和47年で、ここに野口五郎、西城秀樹、郷ひろみの3人が揃い、さらにその翌年に発売された西城の『情熱の嵐』

(作曲・鈴木邦彦) 以後3人の新曲がベストテンに並ぶようになり、「新・御三家」と称されるようになりまし

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いままで

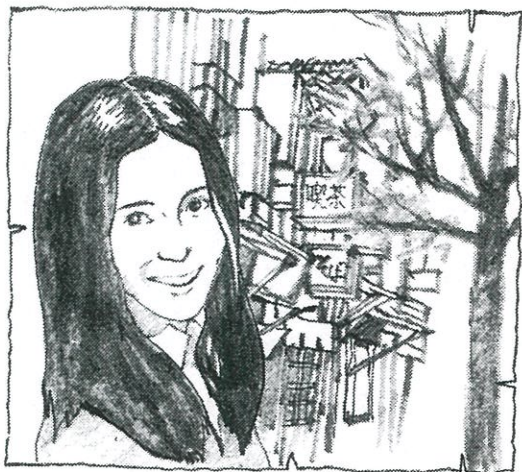
堀井六郎  
絵 松本浦



たが、野口も郷も筒美がアイドルへの道を後押ししました。大ヒットには至りませんでした。実は西城のデビュー曲『恋する季節』も筒美京平作品でした。

筒美は南沙織(以下、シンシア)のデビュー曲『17才』をプロデュース。酒井政利の指示どおり、リン・アーダーソンの『ローズ・ガーデン』のイメージで作り上げましたが、シングル第2弾以降は、自らの感性を優先、「シンシア(Cynthia)」という愛称にふさわしい「バイリンガル少女」のイメージに基づくメロデーとサウンドを提供していきま

す。「Sincere」からの連想と彼



女の歌声から感じとれる「誠実さ」も意識していたのかもしれない。

夏季用のテンポの速い曲にはヴァン・モリソンやエルトン・ジョンの作品を活用、秋季用のしっとりとした曲にはカーペンターズの楽曲イメージを持ってきたり、従来の青春歌謡で聞かれる女声コーラスとは明らかに異なるバックコーラス(シンガーズ・スリーやリバイティ・ベルズによる「ウーワウー」など)を多用したり、

南沙織という歌手を通して「洋楽の歌謡曲化」を試み、その後のJ・POPへと連なる巨大な礎石とします。シンシアの魅力は伸びやかな声質にあります。『好きだから』「大好きよ」とアクセントを外す符割をしたり、ラ行が英語風に巻き舌になるなどの純正歌謡曲から逸脱した点をあえて生かし、うまく彼女の魅力に変えてしまったのも筒美の功績の一つでしょう。

「沖縄返還交渉」が日米間で調印された昭和46年6月にデビューしたシンシアですが、洋楽と歌謡曲を結びつけ、「歌謡ポップス」という世界をさらに開拓するには、日米2国の架け橋的な存在となる彼女こそ、筒美京平にとって理想のシンガーだったように思います。